
真冬の狂気

asanohi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真冬の狂気

【Nコード】

N6052P

【作者名】

asano hi

【あらすじ】

間接的ながら性的な一部描写を含みます。

具体的な残酷な描写はありません。

一種の怪談といえるかもしれません。

真冬のある日コンパから帰った男は、突然声をかけられた女と交わる。

一年後すっかり忘れていた男だが女から食事に招待する手紙が届く。

彼は酩酊していた。

その日、大学の悪友とコンパにいったのだが生憎と目当ての女を捕まえ損ねたのだ。

「ついてない、雨まで降ってきやがる。」彼は舌打ちをした。

酔いの温かみなどとうに消え失せ、12月の東京の雨は身を切るように冷たく痛いほどだった。

「本当なら今頃女の中で暖まってるはずなのについてねえぜ。」

男は繰り返した。

小汚い1LDKのアパートのドアを開ける。切れ掛かった蛍光灯をつけ冷え切った部屋に入ろうとすると女の声があった。

見れば30過ぎだろうか、傘も持っておらず氷点下の冷え込みだというのにずぶ濡れのワンピースを着て寒そうに震えている。そのしただにはシミーズと黒のブラジャーが透けて見えていた。

男は欲情するのを感じた、もとよりコンパの当てが外れてお預けを食っていたせいもある。

「すいません部屋に入れていただけないでしょうか。」

「ああ、はい。」

なぜか訳も聞かずに彼女を部屋に入れてしまった。

男が戸を閉めると、女は腕をクロスさせると服を重ねて一気に脱ぎ捨てた。

黒の揃いの下着姿になると女は男の万年床の上に身を横たえ、僅かにくびをかしげながら、

「暖めて欲しいの。」といった。

男はのどの渴きを覚えた、それは酔いのせいばかりでは無かった。慌てて上下を脱ぎ引きちぎるようにパンティーとブラジャーを脱がすと女に貪りつく。

「付けないで、大丈夫だから」

二人の体は冷え切っていたがそこだけは燃え滾るようであった。二人のくぐもった声が響く。彼女のそこは絡みつくようで酔いも手伝いさして時間もかからずに彼は絶頂を迎える。続いて女もくびを仰け反らせると膺を収縮させる。

考えてみると、これは奇妙なことだった。前技などなら無かったし、男のした事といえばほんの短時間のピストン、それも単調で緩慢なピストンのみであった。

しかしながら女は彼の射精を受けるやいなや目も眩む快感を覚えたのである。

「あゝあゝ」

それだけ女は声に出すとぬれた服をまとい何処かへと去っていった。男はいえ、心地よい疲労のなかで既に眠りに落ちていた。

翌朝寒さで目覚めると、頭が割れるようにいたい。飲みすぎちまったと彼は思った。

昨夜の事を思い出し部屋を見渡すが女の形跡は何も無い。さては夢かと思ったが自分がパンツすら着けずに寝ていることが何よりの証拠だった。

「いい女だった。だが勿体無かった。じっくり味わえばよかった。」時計をみれば朝の7時、講義は一限からだったが頭が痛いし何より眠い。

手に当たった服を着ると目覚まし時計をかけることもせず再び眠りに落ちた。

その日の事は男の怠惰で忙しいキャンパスライフの中に埋もれて忘れ去られていた。

いま男は三年になり就活を始めていた。月日は既に10月半ばであった。

スーツをきて帰ってみると就職関連の手紙に混じって一通の切手の貼られていない手紙が入っていた。怪訝に思うが確かに宛名は自分あてである。

とりあえず開いてみると、

（あの夜の契りをお忘れになつてはおりませんでしょう。今夜はその時のお礼がしたいと思えます。お食事に招待しますので今度の土曜日、夜7時に私の家へどうかいらっしやって下さい。）

そこには住所も記されていた。

不気味に思いつつも、その日は偶然空いていたし、男はいつてみることにした。

このところ忙しく、風俗に行く金も女を捕まえる時間もなかったこともあり、またやれるんじゃないかという気持ちも多分に含まれていた。

尋ねていってみるとそこはなかなか高級そうなマンションであった。女に教えられた暗証番号をつかいエントランスにを過ぎエレベーターに乗りながら男は考えた。

（どういう女だろうか、思えば名前も聞いていない。女一人でこれだけのマンションを借りるのは容易ではあるまい。かと言って妻では俺を呼ぶ訳が分からない。まあいい確かなのはあいつがやれるいい女だつてことだ。）

エレベーターをおり、部屋番号を確認する、確かに女の部屋だ。

やや躊躇したあとインターホンを押すと、少し間があつたあとドアが開かれる。

「ごめんなさい、今料理作つてたから。」

去年と同じ服を着ていたが、比べるとやつれた様な感がある、髪なども痛んでいるようにみえた。

あの時も暗闇の中だったので確かなことは言えないのだが。

促されるままに、テーブルに座る。見渡せば室内にはアップパーミドルな家具が並んでいる。全体には片付いているのだが所々不自然にものが散乱しているのだ。部屋に奇妙な違和感を感じつつも待っている女がワインと料理を持ってくる。

「ストロガノフよ、特製なの、最初はステーキにしようかとも思つただけどちよつとステーキでは臭みがきつくてね。それにこつち

の方が全部使えるし。それからこれはワイン、記念だもの高級なのにしないと。」

食べ始めようとすると、女が止める。

「だめよ、お祈りをしなくては。私たちは生き物の命を戴くんだから。」

彼女が目を瞑り手を合わせる。男も真似をすると、何事かつぶやく。声が小さく聞き取れないが、僅かに主よ、と時々言っているのが聞こえる。

祈りが終わったららしく目を開けてさあ食べましょうという。

肉は筋もなく柔らかでなかなか旨い。

「美味しいでしょう、なかなか手に入らないのよ、こんな肉は。なんとって特製なんだから。」話かけるとも独り言ともつかないよう言う。

どこかやつれを感じさせる彼女の姿の中で彼女の目と唇だけは例外だった。

僅かに飛び出した眼球は爛々とひかり、肉汁に濡れた唇はヌラヌラと輝く。

彼女の飲むワインが何故か血液のように思えてきた。

理性はありえないというのだがそう見えてならないのだ。

馬鹿らしいと思いき食べることに集中すると女が言葉を続ける。

「あれから今日で313日、ずっと楽しみにしてたの。やっと手に入ったわ、この食材が。彼方にはどうしても食べて欲しかったのよ、だってこれはあなたのものであるんですから。どう美味しいですよ。当然だわ、私が一生懸命育てたんですもの。驚いているみたいね、そうよ、あの時の」

彼女の言葉を最後まで聞いていることが出来なかった、こみ上げてくる吐き気を抑えきれずに、否むしる抑えようとせせずに台所にむかい吐き出す。

「何てことするのもったいない。特別製だって言ってるじゃない。」
そういうと

彼が吐き出したものを手で掬うと口に持っていく。

「こつこつのも、悪くないわね、これであなたと私のなかを通ったわけだから。」

男は目を見開くと部屋を飛び出し大通りへと出ると身を投げ出すようにタクシーを止め、自分の部屋を告げた後、即座に訂正し友人の部屋の住所を告げた。

（部屋を変えなくてはならない。あの女は俺の家を知っている。）

数年後男がそのマンションを訪ねるとそこは空き家だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6052p/>

真冬の狂気

2010年12月31日08時13分発行